

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーシエ



親愛なる日本のお友達!!

ガリーナ・タビノヴァ

ジトーミル州チェルノブイリ障害者協会議長

皆さんに、我が「チェルノブイリ障害者協会」の活動について少しばかりお話する前に、私は、この運営委員会を代表して、またチェルノブイリ事故処理作業に直接参加した我が協会のメンバーを代表して、皆さんが私達に与えてくださった大きな援助に対して、心からの感謝を申し述べたいと思います。

皆さんの毎年途切れることのない支援がなければ、私達のうちの多くの者がどんなになっていたか、想像することさえ困難です。

皆さんからのお金で購入した医薬品のおかげで、今年、89人の事故処理作業者が健康を改善することができ、病院の治療コースを終了しました。もちろん、彼らすべてが同一の医療を受けたわけではありません。というのは、患者の病状レベルは様々だからです。ある人は、毎年の予防的治療コースを受けることで充分でしたが、他の人は外科的処置すら必要でした。そのために、各人にかかる出費の額もまちまちです。私達は、皆このことをよく承知しております。それで、最も緊急の治療を求めている健康状態の人を、まず第一に助けるよう努力しております。

(次ページへつづく)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-メール：chachubu@muc.biglobe.ne.jp

州内には、チェルノブイリ身体障害者が非常にたくさんおり、その数は 6,668 人になります。この数は前年と比べると 881 人減少しています。499 人は州外に出たのですが、はなはだ遺憾ながら、382 人は亡くなりました。この人達に対して、私達が成し得たことは、最後の苦痛を軽くする事だけでした。この 382 人のうち 154 人は直接事故処理作業に従事した人で、228 人は放射線の影響で障害者になった人でした。

私達自身、「何もせずに座している」ということのないように努力し、放射線障害者を、極力サナトリウムに受け入れるようにいたしました。今年は、769 人にサナトリウムで保養させることができました。私達は、事実上すべてのメンバーを保養させなければならないということを理解していますが、国の経済状態から考えて、国の側からの援助を期待するわけにはいきません。私達は、自分たちの力とともに、皆さんの支援に期待するしかないのです。

皆さんが、私達の状態をいっそう良く理解できるよう、もう少し数値をあげてみたいと思います。州内にはチェルノブイリ原発事故処理作業者が 12,855 人います。そのうちの 1,014 人は第 1 カテゴリーです。言い換えれば、これらの人々は身体障害者であり、働くことが出来ません。第 1 カテゴリーの事故処理作業者の多くはジトーミルに住んでいて、529 人です。このことは、「チェルノブイリに派遣されたのは優秀な専門家達であり、そのような人達は常に小さな町よりも大都市に多く住んでいる」ということを物語っています。

事故の犠牲者数の数字を見ると恐ろしくなります。第 4 カテゴリーに属する全犠牲者は、289,019 人です。これらの人々の 7 分の 1 がオブルチ地区に、22,000 人がオレフスク地区に、13,500 人がルギンスク地区に住んでいます。大なり小なり、まあまあ暮らせている第 4 カテゴリーを除いたにしても、やはり、長期にわたる支援と援助を必要とする人々が非常にたくさんおります。

もちろん、全ての人々への援助は物理的に不可能です。それで、私達は、援助なしでは生きられないような、最も差し迫っている人だけを援助しております。もし、皆さんからの援助がなくなれば、どうなることでしょうか。昨年私達のところの死者は 382 人でしたが、もし皆さんからの援助がなかったとしたら、この数は 3~4 倍になるでしょう。

皆さんへの手紙を、悲しい言葉で終わらせたくありません。ですから私は、皆さんに次のように申し上げたいと思います。私達チェルノブイリの地獄をくぐり抜けてきた者達は、「自らの中により良い人間性を保ち、出来る限り人間らしく生きる努力をし、どんな苦しみにも応えようとしている」と。

ただ、助けの手をさしのべることができなければ、心の傷が癒えないのです。

敬具

(訳 河田いこひ)

ウクライナ訪問にあたり
脱原発・北信濃ネットワーク
本道多加子

2000年10月5日～14日のウクライナ訪問団は、田中代表、運営委員の神野美知江さん、そして長野県の本道多加子さんの3名に決定しました。

いつも、ニュースレター「ポレーシェ」で、現地の様子や救援活動を読んでいきます。スタディ・ツアーがあることを知り、一度は行ってみたいと思っていました。

この夏「行って見ないか」と声をかけられ、思いがけず早く実現することになりました。事務局から決定の通知を頂き、「運営委員以外の訪問団1号」ということで少し緊張しています。訪問団の目的である「事故処理作業者の調査」などをお手伝いできればと、今資料を読んでいます。

事故から14年が過ぎてもなお、健康被害などが深刻化しています。現実を見聞し、私たちに何が出来るのかを考えたいと思っています。

また、ウクライナは肥沃の地と聞いています。きのこの森や野菜の畑、そして果物の実る生まれた故郷を捨てなければならないなんて、とても切ないことです。その美しい景色や、可能であれば、石棺かプリピャチの錆びた大観覧車を見てみたいです。

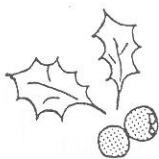
事故後5年と10年の節目には、ウクライナから現地報告の講演会が中部地方各地で開かれました。「5年目」の時、小児科医師アルチュフさんを、長野会場での報告会のあと、善光寺に案内しましたが、何かの行き違いで移動の車とはぐれてしまい、予定の列車に乗れなかった事がありました。アルチュフさんは覚えているでしょうか。その時お世話された、前代表の坂田静子さんは亡くなりましたが、「とても申し訳なかった」と折りにふれ、よく話していました。

「10年目」のコヴァレフスカヤさんは、おしゃれでとても魅力的で素敵な女性でした。夕食の時、ロシア語ができない私達は、ロシア民謡を歌いました。彼女はなんとロシア語で「恋のバカンス」を歌いだし、また皆で一緒に歌い、気持ちの通じる思いがしました。

訪問にあたり、「会いたい人がいれば」と聞かれて、二人の名前が浮かびました。アルチュフさんやコヴァレフスカヤさんにも会えることができそうで、楽しみにしています。



<マイクを持って質問しているのが本道さん>



♥チェルノブイリの子ども達にミルクを！メッセージカードを！♥
2000年ミルク・メッセージカードキャンペーン



今年も「ミルク」と「メッセージカード」を呼びかける季節が巡ってまいりました。

この10年絶えること無く続けたこのキャンペーンで、どれほど多くの子ども達の成長を助け、心に暖かな灯火を灯したことでしょう。「命の糧」「心の糧」となるミルクとメッセージカードを、今年も贈りたいと思います。皆様のご協力をお願いいたします。

☆ミルクへのご協力は…ポレーシェに同封の郵便振込み用紙をご利用ください。

(振込み手数料がかりません。)



郵便振替…00880-7-108610
 加入者名…チェルノブイリ救援・中部

☆カードへのご協力は…

- 1) 絵を描いたり、切り絵を貼った手作りカード、市販のカード、絵葉書などに、あなたのメッセージを書いてください。ウクライナ語、ロシア語、英語、日本語どれでもかまいません。
- 2) そのカードを封筒に入れ、封をしないで、さらに一回り大きい封筒に入れて送ってください。
- 3) 皆様から送られてきた封筒に、事務局で一枚ずつロシア語のメッセージのスタンプを押し、折鶴などを同封します。
- 4) 集まったカードを、航空便でウクライナのクリスマスと新年に間に合うように送り、現地の救援団体「移住基金」によって、病院や孤児院の子ども達に届けられます。

締め切りは12月15日(金)事務局に必着といたします。

送り先とお問い合わせは、チェルノブイリ救援・中部事務局です。



写真展「金子透の世界」が開催されました…8月24日～9月2日

今年2月、代表団と共にウクライナを訪れた青年・金子透さんが、知多市岡田(織姫の里と言われています)で初めての写真展を開催しました。

古い家並みの中に、ひときわ目立つおしゃれな建物があり、その「ちっちゃな美術館-ミュゼ」で開催されました。セピア色の写真は、ウクライナの冬の何気ない街角の表情を捕らえ、けれん味のない好感の持てる写真展でした。強い主張を感じさせる作品ではないけれど、ウクライナの冬の空気が静かに伝わり、また対象に対して素直な眼差しを感じさせる写真展でした。「ウクライナに行って自分の中に大きな変化が生じた。今すぐにでもウクライナに飛んで行き、しばらく暮らしてみたい。」と熱く語る若い初々しい「写真家」の今後に期待したいと思います。彼は撮った写真をポストカードにして、それを販売し、救援カンパしていただきました。因みに作品は10点。キャプション付きで貸し出します。



<灰色の空の下で>

(山盛)

来年度奨学生採用始まる

新学期になり、新しい奨学生の採用が始まりました。

昨年度採用した教育大学5名、医療専門学校（医専）8名のうち医専の4名が卒業しました。今年度は、教育大学と医専は昨年度と同数を採用し、そのほかに農業生態学アカデミーから4名程度を採用する計画です。計画どおりになれば、今年度の奨学生の数はつぎのようになります（奨学金は2年生から支給）。

	教育大	医学専門学校		農業生態学 アカデミー	計
		2年課程	3年課程		
継続	5	0	4	0	9
新規	5	4	4	4	17
計	10	4	8	4	26

医専を卒業した学生のうち2名は医科大学をめざしたのですが、残念ながら合格しませんでした。合格すれば奨学金を支給することにしてあり、結果がでるのを待っていたので、選考作業の開始が少し遅れました。

来年度以降も教育大5名、医専8名(2年課程、3年課程各4名)をベースにし、医科大進学者があればそれに、なければその他の学校の学生に支給することになっています。

(田中良明)

イリーナからの手紙

チェル救の皆様へ

今日は。お元気でしょうか。

またチェルノブリの関する面白そうな記事が見つかりましたのでお送りします。

日本はいまムシアツイでしょう。ここも今年、非常に暑くてたまりません。今日は、たとえば37℃を超えたそうですよ。それに台風みたいなもの—はげしくて強い風—が近づいてきました。明日キエフまでも着くと予想されていますが、どうなるだろうか皆心配しています。

それにですね、もう竹内さんから聞かれていると思いますが、私は日本大使館に就職しました。まだ大学を卒業していませんけど。あと一年がんばれば大学を卒業できます。10月からは仕事も授業もあるから…まー、とりあえず仕事をしながら夏を楽しんでいます。

オクサナも相変わらず元気です。去年の9月に皆さんと会ったことを、いつも楽しく思っているみたい。今日も、チェル救に私が手紙を書いている様子を見て、「よろしく伝えてね」と。

また手紙を書きます。

イリーナより

00.08.22.



※イリーナより、日本語直筆での手紙が届きましたので、そのまま載せてみました。チェルノブリの記事は、事務局でもインターネットより入手しており、また機会がありましたら、「ポレーシエ」誌上でも掲載いたします。(かよ)

特集!! 奨学生からの手紙 (抄訳)



シベツキー エフゲニー君

ウクライナの詩人、I. フランコに因んで名付けられた ZTT 大学での第4学期が終わろうとしています。

私は、日本から貰っている奨学金に感謝しています。

とても助かります。それに応えてもっと勉強します。

私の母は祖父母と共にオレフスク地方に住んでいます。

そこはレベル3の放射能汚染地域です。よく病気にかかり

ます。チェルノブイリの黒いベルが鳴って14年経ちました。14年間ナロジチ地域の大半は無人ですし、オレフスクとオブルチ地域は半分死の大地です。しかしチェルノブイリ原発は動いています。多くの歌が歌われたポレーシェ(大地)は死んでいます。母のところへ戻ると私は森へ行きます。白樺や樺の木の下、草の中には大きなきのこがあり、苺が赤く実っています。あなたなら、ワレニキ(ウクライナ風の水餃子)に添えるジャムのために、ブルーベリーを摘むでしょう。しかし、頭が聞くのです“何のために?”と。アザレアの花はとても甘い香りがし、空気中には蚊が、裏庭には人々がいて…、とても美しい私達のドレブリャンスカ村!! しかし、今はとてもひどい状態です。

* * * * *



コステューシコ オクサーナさん

あなた方からの奨学金をもらって勉学の一年が過ぎました。私はその一年を評価するならば、成功でした。自分でも多くの新しい興味深いことを知るようになりました。

物理化学・組織学・医学の三つの試験がありました。

すべての試験を素晴らしい成績で通りました。

今は夏の学期にはいり、もっと難しい二つの試験に向けて

準備中です。大学に入学したまさにその時から、私の目的は「よく勉強すること」となりました。これが、自分のことで最初に両親に約束したことです。あの恐ろしい災害から14年が過ぎました。それが長いか短いか私には分かりません。しかし、結果はもう感じられます。人によっては自分の健康で償ったひどい過ちです。大学で私は科学と生物学を勉強し、また生命への放射能の与える影響を勉強しています。今勉強している場所は、汚染の比較的少ない地域とされています。しかし、卒業後は仕事のために家に戻ります。家は放射能汚染の地域にあります。放射能の影響は私の健康に負の影響をもたらします。甲状腺が大きくなり、頭痛がよく起こり、視力も弱くなりました。すぐに疲れ易くなり、勉強の支障になります。しかし、努力と可能

性を使って勉強しようとまだ頑張っています。私は財政支援に大変感謝しています。この奨学金でかなり助かります。ありがとうございます。

* * * * *



コヴァリシナ ナターリャさん から自分達を守ることはできず、悲劇が残されています。多くの努力がなされ、多くの資金が災害の克服に費やされましたが、私達は病気がちで、大気や水・土地はまだ汚染されていて、生命の脅威となっています。

わが国の人々に、多くの苦しみ・悲しみをもたらしたこの悲劇を、「私達の世代だけでなく、次の世代でも記憶される」と確信することは困難です。

* * * * *



ヴラソヴェッツ エツさん 自信を持っています。それは自分で選んだ専攻であり、勉強中に多くの支えをくださった、私の先生達とあなた方に将来応えたいと望んでいます。わが国に恐ろしい不幸をもたらしたチェルノブイリ事故…あの恐ろしい日から既に14年が過ぎました。短い時間ではありませんでした。私達は、徐々にそんな生活に慣れました。私達は働き、勉強し、休み、子ども達を育て、未来を夢見ます。そして、普通の生活を送り、特に汚染地域で暮らしていることを忘れていません。そこでは何年にもわたって放射能の黒い空間が横たわり、恐ろしい夜を残しています。放射能検知機のデータは、今私達の注意を引かないし、私達の親族が恐ろしい病気で若くして死んでいるという事実、生まれたばかりの小さい子どもが、医者 of 厳重な治療下にあり、私達自身が汚染をしているという事実が私達や私達の社会にあります。

それらには抵抗できないし、何年にもわたって、私達と私達の子どものその恐ろしい十字架を背負わなければならないことを、忘れることはできないのです。

伊那谷の夜は妖しく更けて…

市原佳代

今年に入ってから、運営委員会にお邪魔するようになった。運営委員会の特典は、委員会後の飲み会。委員会の間は幽体離脱を繰り返しながら、終了すると本領発揮となる私。そんな私に“お泊まり運営委員会”がめぐってきた。場所は伊那。伊那のメンバーである小牧さんの手作り山荘に泊めていただけるという素晴らしい企画。喜びいさんで灼熱の名古屋を脱出したのは8月5日。



委員会は、通常の内容に加えて、原さんのたたき台をもとに「救援・中部」の長期展望を議論するという予定だったが、タイムアウトで一部持ち越しとなった。

そして夜…。去年のスタディー・ツアー以来のアウトドアでのバーベキュー。山荘の近くに流れる小川には、すいかならぬ大量のビールが冷やしてある。なんともいい気分。競技スキーのポールのごとく人の側をぬって歩く“きーちゃん”こと原さんの飼い犬をゲストに迎え、酒宴は明け方まで続いた。

翌日6日は、運営委員会としては特に予定がないので、自然エネルギー&モナザイト見学ツアーとなった。まず、小牧さん宅の水力発電。ご自宅の裏の農業用水路に、それは設置してあった。原さん作とのこと。羽は20センチくらい。水路にスクリューを入れると、いきおいよく回る。そのスクリューをいじりたがる“きーちゃん”。無理もない。いたずら盛りの仔犬だもの。発電機としては決して大きなものではないが、二部屋分くらいの電力をまかなえるとのこと。素晴らしい。

次に、同じく伊那のメンバーである小野寺さんの牧場のメタンガス。牛舎に入ると、うらやましいほどの巨乳の牛たちが出迎えてくれた。清潔な牛舎はにおいも感じない。その片隅にコンクリートで固めた穴があり、そこに牛4頭分の糞を入れ、その後、地中で発熱して、ひと月も経つと立派なガスと化す。その炎は美しい青色で、天然ガスとなら変わらない。隣接しているご自宅、牛舎ともに十分な供給量とのこと。素晴らしい。

以上、二つの自然エネルギーは、都会では困難だが、大規模な設備、多額の投資が不要の、実現可能なエネルギーということを知った。人々がエネルギーを「買うもの」という認識をあらため、「手作りするもの」と考えるようになれば、石油にも原発にも頼らなくてもいいはずなのだ。これからの時代は、「食料もエネルギーも自給自足が基本だ！」ってなるといいな。

最後に、恐怖のモナサイトだ。「そこ」に近づくにつれ、少し緊張を帯びてきた。少し手前から放射能測定器で数値を確認し始める。「そこ」から 50 メートルほど離れた駐車場に車をとめ降りてみると、眠っていた測定器が反応した。風によって放射能が漂っているのだろうか。やばい雰囲気。緊張度が増す。

今では珍しいよろず屋の向かいに、その廃屋はあった。なんてことはない、ただの無人の民家だ。だがその中には、世にも恐ろしいものが詰まっているというわけだ。よく見ると、ぐるりと張り巡らされたロープに掛けられた「立入禁止」の文字が間違っている。書いたのは科技厅の人間か警察官か。こんな簡単な字を知らなくても公務員になれることに、しばし驚く。

私がばかな感想を抱いている間にも、測定は続けられていた。アラーム音が鳴り響いている。思い出したように人をかきわけ測定器をのぞくと、久しぶりの手ごたえを感じて能力をフル稼働させている測定器は、値をどんどん上げていく。とどまることを知らない。玄関手前の入り口の道路端で、毎時 12~13 マイクロ・シーベルト。自然放射線の 150~200 倍だ。ためしに少し位置を変えて測定してみる。8~9 マイクロ・シーベルト。少し下がった。でも高い。数ヶ所測定して分かったことは、多分モナサイトを運び入れたときに使われたであろう玄関口が、特に放射線量が高いということだ。モナサイトがこぼれたと思われる草むらのほんのわずかなスポットの数値は 22 マイクロ・シーベルト。自然放射線の 200~300 倍だ。チェルノブイリ原発の近くにも等しい線量…。伊那のさわやかな風が、どす黒く変化した感覚に襲われた。

河田さんいわく、「よろず屋を含む近所数軒で、影響が出る可能性がある」とのこと。私たちが不審者と思ったのか、地元の人がいぶかしげな面持ちで通り過ぎていく。この人たちの運命はいかに！

測定もすみ、名残惜しい気持ちでその場を立ち去る。車をとめた駐車場まで執念深く測定すると、モナサイトを運び込んだとき、どうやらいま私たちが歩いている道路にもモナサイトをこぼしたのか、やたら高い。そうか、さっき車を降りたとき、放射能が風に乗っていると思ったのは間違いで、道路上に落ちていたんだ。逃げ場がない…。こんな地域が日本にまだ何ヶ所もあるなんて、信じられない。さすが神風特攻隊を考え出す国だ。国民の命を軽視する体質はちっとも変わっていない。

暗い気持ちも、そのあとに食べたおいしいお蕎麦で少しなくさめられたが、「他人事」ではすまされない事態に、チェルノブイリを重ねる。



チェルノブイリ救援 ナターシャ・グジー コンサート

ナターシャ・グジーは6歳の春、原発から3.5キロ離れたプリピャチ市で被曝しました。あれから14年、忘れることの許されない記憶を、ウクライナの音楽に託して歌い継ごうとしています。

ウクライナ地方の民族楽器バンドウーラの深く繊細な響きに、水晶のように美しい歌声をのせるナターシャ。悲劇の記憶を浄化する祈りにも似た歌の数々。コンサートの収益金は、放射線障害に苦しむ子ども達の治療費にあてられます。

と き 2000年12月15日(金) 午後6時45分開演

ところ 西文化小劇場

料 金 前売2,000円(当日2,500円)

主 催 自治労名古屋市労働組合

後 援 チェルノブイリ救援・中部



<撮影 広河隆一>

チェルノブイリ救援チャリティー半襟展示会のお知らせ

日 時: 11月7日(火)～11月19日(日) 午前9時～午後6時(最終日は4時終了)

会 場: 花ギャラリー宴(utage) Tel. 0587-53-1550

愛知県江南市高屋田丁北上25-2 (名鉄犬山線江南駅下車 タクシーで5分)

入場料: 500円 小・中・高生は200円

今から40数年前、亡くなった姉の形見の刺繍の半襟を着けて、七つのお祝いをしてもらいました。季刊誌『銀花』に載っていた半襟の美しさに魅せられ、蒐め始めたのは20代の時でした。

今回は、秋冬の図柄を中心に、半襟に型紙、刺繍の帯、襦袢、日本髪を結う折の「鹿の子」と呼ばれる絞りの小さな布なども展示いたします。日本の古き良き時代の服飾の世界をお愉しみください。皆様のおこしをお待ち申し上げます。なお、会期中、会場係などお手伝いいただける方、ご連絡ください。

チェルノブイリ救援・一宮 つぼみを守る会 中島しぐれ

三輪弘美ソプラノ・リサイタル

平井康三郎作品の夕べ「水琴窟によせて」のご案内

11月8日(水) 午後6時半開場。場所は名古屋市伏見の「しらかわホール」。

入場料前売り4,000円。チケット申し込みは救援・中部事務所まで。

これまでイタリア歌曲を歌ってきた三輪弘美さんが、名古屋芸大教授就任を記念して、北原白秋・平井康三郎などの日本歌曲を唱う。ピアノ・フルート・尺八・一三弦・一七弦などの他に、水琴窟の調べも楽しめる。

三輪弘美さんは、救援・中部発足当初からご支援いただいている名古屋の音楽家。愛知芸術劇場でのチェルノブイリ・チャリティーコンサートでは、1500の席があふれ、大勢の方が入れないという事件(?)が記憶に生々しい。入場料の一部は、チェルノブイリ救援・中部を通じて被災者に送られます。ふるってご参加を!

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部 キエフ在住 竹内高明)

・キエフ郊外数 km のスヴァトシゴミ処分場の広さは 15 ヘクタール。数百 m へだたった所に村があり、さらに周囲数 km の範囲に 3 つの村があって、この 4 つに約 6,000 人が住んでいる。法的には、この規模なら 1 日にダンプカー 8 台以上の搬入は禁止されているにもかかわらず、処分場には 1 日 20 台以上が来ている。数百人の作業員により金属及びビン類が分別され、残りはトラクターの掘った 2 m ほどの穴にそのまま投げ込まれる。キエフ周辺だけで 1,500 ケ所のゴミ処分場があるといわれるが、うち法的に認可を受けているものは 40 に満たない。キエフ州エコロジー課職員によれば、州内のゴミ処分場の 80% 以上は、現代の安全基準を満たしていないという。処分場に住みつき、残飯をあさるホームレスの人々もいる。

環境省のデータによれば、ウクライナで年間に出るゴミの総量は 400 億トン以上。国内のゴミ処理工場は 4 ケ所 (キエフ・シンフェローポリ・ドニエプロペトロフスク・ハリコフ) のみ。

(『キエフ・ポスト』8月24日号)

・ウクライナ南部ニコラエフスク州の 4 つの村で、環境汚染が原因と認められる皮膚病が発生。8月28日までに 369 人が発病 (うち 208 人は児童)。発疹のほか、肝臓・膵臓の異常も発見されており、化学物質による中毒と考えられるが、原因は未だ特定されていない。しかし、食品から検出された硝酸塩から、この地域に埋め立て処分されたミサイル燃料による汚染の疑いが指摘されている。8月になって初めて、これらの村からの児童の疎開が組織されたが、この時点ですでに児童 (総数 415 名) の半数は発病していた。同地域には、核兵器廃絶協定に基づき解体中のミサイル多数が存在しており、この作業を一時停止せよとの陳情が予定されている。地域住民の証言によれば、5月28日、銀紅色の煙の排出があり、それが一日のうちにこれらの村に降下したという。その日、鳥はすべて村から姿を消し、7月4日、最初の皮膚病の兆候が子ども達に現れた。(『日々新聞』8月30日号、『イズヴェスチャ・ウクライナ版』9月2日号)

・最近の降雨量の増加のため、4号炉「石棺」内にたまった水が通常の 2.5 倍に増加。これまで水が達しなかった 9 部屋が浸水。しかし、「石棺」からもれ出す水の放射能レベルは、許容範囲という。「石棺」からの液状放射性廃棄物汲み出しと再処理、「石棺」内部のチェック・管理が続けられている。

(『日々新聞』8月30日号、『キエフ・ポスト』8月31日号)



生活費のたしに路上で物を売る女性

撮影:金子透

大学では新学年が始まりましたが、私は今年は 5 年の授業担当、9 月中は 5 年生が実習でいないので、実質上仕事はありません。今週中に、また滞在延長の手続きをしなければいけませんが。

15~20℃くらいの気温で、すっかり秋という感じです。日本の国際交流基金のプログラムで、また私の大学から 4 人が日本へ留学することになり、マリヤ・イヴァフネンコという人が、10 月から名古屋大学へ行くそうです。

不浄の水がまかれた・・・

(写真集「チェルノブイリの火」より)

手記 レオニード・アントニューク (ジトーミル州消防局長・陸軍大佐)

1986年の5月は、私にとっては「重水」という記号のもとに始まった。緊張は信じがたいものだった。あのまるで夢のような現実の中から、何を見分けたら良いのか？

5月6日の朝、我々ジトーミルの者、キエフの者、そして車2台のビラ・チェクヴァの若者たちは、特別任務に再び呼び出された。

我々を出迎えた陸軍少将のソロコフは、「我々は原子炉の下から水をポンプでくみ出さなければならぬ」と説明した。我々は消防車の準備を始めたが、車はまるでわざとのように、2本のホースの中に水を吸い上げるのを嫌がった。幸い専門家がいて助けてくれた。どうやらパッキンの取り付けが悪いようだった。指示に従って、川に出かけ練習した。教官が我々を見つけ、叱りつけた。私は状況に関する情報を出すよう求め、夜になってデータが届いた。行く予定の場所は、毎時70レントゲンである。原子炉の外では15mの所で1200レントゲンだ。装甲輸送車の後に従って、我々はやっと原子炉のゲートに近づき、本部のある燃料倉庫前で降りた。医師は我々に錠剤を配り、「やってのけようという気概のある者はアルコールを飲むと良い」と言った。我々は車を原子炉に進めた。最初にビル・チェクヴァの若者達が自分たちの車をホースに連結し、水は浄化施設に流れ始めた。しかし、すぐにエンストした。我々の運転士もどこかへ消えた。後で、「この時気絶した運転士は救急車が運び去った」ということが分かった。私はズボロウシキー大尉と共に、原子炉の真っ暗なトンネルを走って彼らの車にたどり着いたが、車が何故動かないのか、長い間理解できなかった。我々の順番が来た。「原子炉は水中に沈むかもしれない。そうなれば…これは水爆だ。半径300Km内で生き残るものは何もないことになる。」将官は我々にそう説明した。



私は兵士達と共に一からやり直した。車は動くようになった。しかし、まもなく加熱しエンジンが止まった。ラジエーターを冷やすため、放射能を帯びた水を破れたホースからバケツに受けた。我々は皆放射能の水を浴びた。本部に戻り、脱ぎ捨てられた服の山から、着替え用に乾いたものを線量計で測り選んだ。2レントゲンなら着て良い、5ならダメ…。

5月8日夜2時になって、やっと交代要員が到着した。我々は装甲車に乗せられ、チェルノブイリの町まで運ばれた。そこで床に倒れ込むようにして眠った。イヴァンコフではすべての病院が我々を涙で迎えた。花束は腕いっぱいになった。この後何が起こりうるのか、人々は知っていた。十分な食事とシャンパンが出された。検査も分析もされた。我々がキャンプに到着したとき、そこではすでに私は死んだものと思われていた。ジトーミルに帰り、我々の病院に1カ月、モスクワの病院に1ヶ月入院した。その後私には何も起こらない。しかし、私の健康は優れない。あの時私はちゃんと診てもらったのだろうか。あの時、私の頭にあったのは一つの事、任務の事だけだった。火事の時と同じだ。もっと早く！もっと！これが全てだった。今それを悔やんでもしかたない。事態はいずれにせよ異常だったのだ。惨事は犠牲を要求した。そして我々は自覚してそこへ赴いたのだ。

(ウクライナ語訳 河田いこひ)

ベラルーシの大地の中で（菊池由希子）

7月26日～8月3日の間、私は「日本チェルノブイリ連帯基金」のスタディツアーに参加しました。私は現在、青森県立弘前高校2年の17歳で、小学校のころから将来チェルノブイリ汚染地域で医療支援をするという夢があり、私にとってはその夢を確かめに行く旅となりました。



＜中央が菊池さん＞

事務局ではきっと、私の年齢を今知って、びっくりしていることでしょう。それに、チェルノブイリ原発の30km圏内に18歳以下が入ることができないところ、ベラルーシのゴメリ州副知事さんのお力添えにより、特別に入ることができました。チェルノブイリ原発では、今年中に3号炉が停止され、その後、現在働いている4,000人のうち20%が散り、80%が残って15年間管理するそうです。また、5・6号炉の間に輸出用電力供給のための火力発電所を建設するという計画もあるんだそうです。さらに「ウクライナの5つの原発のうち4つはまだ動いている。永遠に…」と。強制移住地区では2つの村を訪れました。一つは映画「ナージャの村」の舞台となったドウジチ村。村には現在6人しか住んでいません。ナージャの家は、撮影当時とはすっかり変わり果てていました。もう一つは、本橋監督の次回作「アレクセイと泉」の舞台となるブジシチェ村です。その“泉”の水は、100年前の水が湧き出ているため、放射能に汚染されていなく、私も飲んでみたのですが、とてもおいしかったです。私は17歳という今に、チェルノブイリを訪れることができたということにとっても感謝しています。ベラルーシは見渡す限り山がなく、緩やかな丘陵に広がる畑、その中に牛や羊やがちょうたちがのんびり暮らしています。こんなに美しいベラルーシの大地に、放射能が降り注いでいるだなんて信じられない気持ちと、早く夢を叶えて再びこの地へ来るんだという決心が固まりました。

読者の便り（枚方市 S.A.さん）

* * * * *

「ポーシェ」58号で、モナザイト放置事件についてようやく詳しい状況を知ることができました。科技厅に個人的に聞くと、「池田氏の刑事責任を問わないのは、警察が決めたことなので、科技厅は何とも言えない」とのことでした。読売（大阪版 7/8）では“警視庁は池田氏らの原子炉等規制法違反容疑の立件を断念。科技厅から「違法な行為はない」との正式回答を受けての判断”という表現でした。

政府もマスコミも、放射能にまみれた現場から遠いところにいます。現場で働く人以外に、いったい誰が「安全だ」「危険だ」と決められるのでしょうか。「隠す」「だます」「現場に犠牲を強いる」、原子力を人間の仕事に加えてしまったのは、本当に大きなあやまちです。チェルノブイリ原発の職員や消防士の皆さんが、強い責任感をもって対処したために、より大きな苦しみを強いられる結果になったと思うと、体がちぎれそうです。今、原子力が現実に社会に組み込まれているからといって、「やめる」「やめさせる」勇気をもともしないのは、本当に大きな罪ですね。ポヒルチェンコさんちの三つ子ちゃんの、ふっくらした頬にそっと触れて、静かに考えてみたいです。（お父さんとお母さんもかわいい！）

事務局便り

◎事務局の開始時間および終了時間の変更お知らせ

これまでは、月水金の午前 10 時 30 分から午後 3 時 30 分まででしたが、10 月からは、月水金の午前 10 時から午後 5 時までとなります。皆様からのご要望に応じて、当面このようにやってみます。ほかにご要望がありましたら、事務局まで。

◎9 月 11 日の集中豪雨、多くの方にご心配を頂きましたが、事務局も私達も幸い被害はありませんでした。被害にあわれた方々には、心からお見舞いを申し上げます。

◎水曜日と土日、本国と日本の祝日は休業。受付時間は午前・午後各 2 時間のみ。これが駐日ウクライナ大使館の事務所！ 10 月にウクライナを訪問する一行のビザ申請書類がそろったのが 9 月 11 日、次の日は集中豪雨で新幹線がストップ。13 日と 15 日は休業、つまりこの週は 14 日あるのみ。山盛さんが必死の思いで、東京品川のウクライナ大使館にかけつけて、なんとか無事に受け付けてもらいました。

我等が救援する国（＝友好国ウクライナ）の駐日大使館は、「日ウの交流や救援への認識ゼロ。 広報意欲ゼロ。サービス精神ゼロ。」というのが今の私達の実感…。ザンネンです。

（松田）

春日井教会で、チェルノブイリ・チャリティー・コンサート

8 月 27 日（日）まだまだ暑い夏の夜、今年もまたチェルノブイリ被災者のためにクラシック・コンサートが開かれた。瀟洒で美しいこの教会には、この町出身の辻宏氏（辻オルガン）制作の 2 台目のパイプオルガンがある。演奏者は名古屋教会の鈴木朋宏（トランペット）と鈴木牧子（オルガン）夫妻の競演。子どもからお年寄りまで 60 人ほど。バッハやモーツァルト、ヘンデルの美しい音色に久しぶりに時間を忘れて聞き入った。入場無料。帰りがけにチェルノブイリのために、めいめいが募金箱に寄付をする。翌日、三谷牧師さんが早速集まった募金を抱えて、事務所を訪れてくださった。本当にありがとうございました。感謝。

編集後記

☆は～ガッカリ。たった今、トルシエジャパンがアメリカに負けた。手はキーボードの上で止まり、目は画面に釘付け。その甲斐もなく。この恨みは 2 年後の世界カップではらす！（かよ）

☆訪ウの前に、通い始めた虫歯治療もあと一回の受診で完治！ 喜ぶ私に「はいしゃ」は不吉だ！とかよが言う…なぜか大雨洪水警報まで発令された。再び災害にならぬよう祈る。（美）

☆7～8 年ぶりに事務局に来ました。「神田川」の歌が流れるようなアパート、なつかしく思い出しました。いろいろと楽しい編集作業でした。また参加します。（野村康子）

☆山が動き、天が裂ける…自然の驚異、ひとたまりもない私達。この上“原発震災”（地震で原発が壊れ、震災と同時に核災害もおこる）など起こったら…祈るだけでは避けられない。原発を止めなくては。（京）

☆愛知県国際交流協会にも、ボランティア事業に対する交付金制度がある事を知り、わがチェル救のスタッフ（山盛さん とかよちゃん）が申請担当者として名乗りをあげた。そして、見事「命のゆりかご（保育器）」のため、26 万円をゲット。頼もしいウーマンパワーでしょ！（J）